

[B年] 公現後第6主日(2026年2月15日)**【旧約聖書日課】 ヨナ書 1章1節～2章1節**

1¹主の言葉がアミタイの子ヨナに臨んだ。2「さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている。」3しかしヨナは主から逃れようとして出発し、タルシシュに向かった。ヤッファに下ると、折よくタルシシュ行きの船が見つかったので、船賃を払って乗り込み、人々に紛れ込んで主から逃れようと、タルシシュに向かった。

4主は大風を海に向かって放たれたので、海は大荒れとなり、船は今にも砕けんばかりとなった。5船乗りたちは恐怖に陥り、それぞれ自分の神に助けを求めて叫びをあげ、積み荷を海に投げ捨て、船を少しでも軽くしようとした。しかし、ヨナは船底に降りて横になり、ぐっすりと寝込んでいた。6船長はヨナのところに来て言った。「寝ているとは何事か。さあ、起きてあなたの神を呼べ。神が気づいて助けてくれるかもしれない。」

7さて、人々は互いに言った。「さあ、くじを引こう。誰のせいで、我々にこの災難がふりかかったのか、はっきりさせよう。」そこで、くじを引くとヨナに当たった。8人々は彼に詰め寄って、「さあ、話してくれ。この災難が我々にふりかかったのは、誰のせいだ。あなたは何の仕事で行くのか。どこから来たのか。国はどこで、どの民族の出身なのか」と言った。9ヨナは彼らに言った。「わたしはヘブライ人だ。海と陸とを創造された天の神、主を畏れる者だ。」10人々は非常に恐れ、ヨナに言った。「なんという事をしたのだ。」人々はヨナが、主の前から逃げて来たことを知った。彼が白状したからである。11彼らはヨナに言った。「あなたをどうしたら、海が静まるのだろうか。」海は荒れる一方だった。12ヨナは彼らに言った。「わたしの手足を捕らえて海にほうり込むがよい。そうすれば、海は穏やかになる。わたしのせいで、この大嵐があなたたちを見舞ったことは、わたしが知っている。」

13乗組員は船を漕いで陸に戻そうとしたが、できなかった。海がますます荒れて、襲いかかってきたからである。14ついに、彼らは主に向かって

叫んだ。「ああ、主よ、この男の命のゆえに、滅ぼさないでください。無実の者を殺したとって責めないでください。主よ、すべてはあなたの御心のままなのですから。」15彼らがヨナの手足を捕らえて海へほうり込むと、荒れ狂っていた海は静まった。

16人々は大いに主を畏れ、いけにえをささげ、誓いを立てた。

2¹さて、主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。

【使徒書日課】 ヘブライ人への手紙 2章1～4節

1だから、わたしたちは聞いたことにいっそう注意を払わねばなりません。そうでないと、押し流されてしまいます。2もし、天使たちを通して語られた言葉が効力を発し、すべての違犯や不従順が当然な罰を受けたとするならば、3ましてわたしたちは、これほど大きな救いに対してむとんちやくでいて、どうして罰を逃れることができましょう。この救いは、主が最初に語られ、それを聞いた人々によってわたしたちに確かなものとして示され、4更に神もまた、しるし、不思議な業、さまざまな奇跡、聖霊の賜物を御心に従って分け与えて、証ししておられます。

【福音書日課】 マルコによる福音書 4章35～41節

35その日の夕方になって、イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われた。36そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。37激しい突風が起り、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。38しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。39イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり風になった。40イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」41弟子たちは非常に恐れて、「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言った。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ヨナ書 1章1節～2章1節

1 ¹主の言葉がアミタイの子ヨナに臨んだ。²
 「立って、あの大きい都ニネベに行き、人々に向
 かって呼びかけよ。彼らの悪が私の前に上って
 来たからだ。」³しかし、ヨナは立ち上がると、主
 の御顔を避け、タルシシュに向けて逃亡を図った。
 彼がヤッファに下ると、タルシシュ行きの船が見
 つかったので、主の御顔を避けてタルシシュへ行
 こうと、船賃を払って人々と共に船に乗り込んだ。

⁴だが、主が海に向かって大風を起こされたの
 で海は大しけとなり、船は今にも砕けそうになっ
 た。⁵船乗りたちは恐怖のあまりそれぞれの神に
 向かって叫び、海に積み荷を投げ捨て、船を軽く
 しようとした。一方ヨナは、船底に降りて横たわ
 り、寝入っていた。⁶やがて、船長がヨナのところ
 に来て言った。

「なぜ寝ているのか。さあ起きて、あなたの神
 に呼びかけなさい。神は我々のことを顧み、減ぼ
 さずにおかれるかもしれない。」

⁷人々は互いに言った。「さあ、この災いが我々
 に降りかかったのは誰のせいなのか、くじを引い
 て確かめよう。」そこで、彼らがかくじを引くと、
 ヨナに当たった。⁸彼らはヨナに言った。「さあ、
 我々に話してほしい。この災難が我々に降りかか
 ったのは、誰のせいなのか。あなたの仕事は何か。あ
 なたはどこから来たのか。国はどこで、どの民の
 出身なのか。」⁹ヨナは彼らに言った。「私はヘブ
 ライ人です。海と陸とを造られた天の神、主を畏
 れる者です。」¹⁰人々は非常に恐れ、ヨナに「あな
 たは何をしたのか」と言った。ヨナが、主の御顔
 を避けて逃亡したことを伝えたので、人々はその
 経緯を知った。。。

¹¹彼らはヨナに言った。「あなたをどうすれば、
 海は静まるだろうか。」海は依然として荒れ狂っ
 たままであった。¹²ヨナは言った。「私を担いで、
 海に投げ込んでください。そうすれば海は静まる
 でしょう。この大しけがあなたがたを襲ったのは、
 私のせいだと分かっています。」¹³人々は船を漕
 ぎ、陸に戻そうとしたが、できなかった。海は彼

らに逆らって荒れ狂ったままであった。¹⁴ついに、
 彼らは主に向かって叫んだ。「ああ、主よ、この
 男の命のために、我々を減ぼさないでください。
 無実の者を殺すという血の責めを我々に負わせ
 ないでください。あなたは主、思いのままになさ
 るお方です。」¹⁵こうして、彼らがヨナを捕らえ、
 海に投げ込むと、海は荒れるのをやめた。¹⁶人々
 は非常に主を恐れ、いけにえを献げて誓いを立て
 た。。

2 ¹主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませ
 たので、ヨナは三日三晩その魚の腹の中にいた。

ヘブライ人への手紙 2章1～4節

¹だから、私たちは押し流されないように、聞いた
 ことにいっそう注意を払わねばなりません。²天
 使たちを通して語られた言葉が確かなものとな
 り、あらゆる違犯や不従順が当然の報いを受けた
 とすれば、³私たちは、これほど大きな救いをな
 がしるにして、どうして報いを逃れることができ
 ましょう。この救いは、主が最初に語られ、それ
 を聞いた人々が私たちに確かなものとして示し
 ました。⁴さらに神も、しるし、不思議な業、さま
 ざまな奇跡により、また、御心に従い聖霊の賜物
 を分け与えることによって、証ししておられます。

マルコによる福音書 4章35～41節

³⁵さて、その日の夕方になると、イエスは弟子
 たちに、「向こう岸に渡ろう」と言われた。³⁶そ
 こで、彼らは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せた
 まま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。³⁷す
 ると、激しい突風が起こり、波が舟の中まで入り
 込み、舟は水浸しになった。³⁸しかし、イエス自
 身は、艫の方で枕をして眠っておられた。そこで、
 弟子たちはイエスを起こして、「先生、私たちが
 おぼれ死んでも、かまわないのですか」と言った。
³⁹イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙
 れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、す
 っかり風になった。⁴⁰イエスは言われた。「なぜ
 怖がるのか。まだ信仰がないのか。」⁴¹弟子たち
 は非常に恐れて、「一体この方はどなたなのだろ
 う。風も湖さえも従うではないか」と互いに言っ
 た。。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・2月15日「公現後第6主日」の日課主題は「奇跡を行うキリスト」。

・2月第3日曜日は、石神井教会では「創立記念礼拝」と定めており、当日はゲスト説教者の指定する聖書箇所を礼拝で朗読する。

・旧約日課は、「ヨナ書」から、ヨナの物語の第一部。使徒書日課は、「ヘブライ人への手紙」から、冒頭に置かれた勧告のまとめ部分。福音書日課は、嵐の湖上での出来事を描く説話伝承の箇所。

旧約日課(ヨナ1章より)

・「ヨナ書」は、ユダヤ教正典(ヘブライ語聖書)の区分で「預言書」の最後に置かれた「十二預言者」の第五に置かれた預言文書。書名となっている「ヨナ」は、標題(1:1)にあるとおり「アミタイの子ヨナ」と明示されているが、この預言者「アミタイの子ヨナ」については、「列王記下」14:25が、北王国イスラエルの王「ヨアシシュの子ヤロブアム」に仕えた宮廷預言者として伝えているほかは、新約・福音書で引用(マタイ12:39~41、同16:4、ルカ11:29~32)が見られるのみである。

・「ヨナ書」は、預言者ヨナがアッシリアの都ニネベに遣わされ、神の裁きを告げる使命を果たすまでを民話風に語るもので、他の預言文書に見られるような預言句集としてではなく、大部分が預言者伝承説話として構成されている。おそらく、本預言書は、「イザヤ書」など他の預言書の多くが宮廷で公式文書として作成された預言書を元にしていないのは異なり、預言者と同時代ではない後世になってから民間伝承などを元にして著された文書と推認される。

・「ヨナ書」が登場人物「アミタイの子ヨナ」の名を挙げることで設定しているのは、前8世紀前半の北王国イスラエルがヤロブアム王(在位=前786~746年頃)のもとで全盛期を迎えていた時代である。この時代は、前10世紀ごろから台頭し長くオリエント世界を席卷していたアッシリア帝国の権勢が一時的に衰えていた時期で、北王国もこれに乗じて地方覇権を拡大しようとしていた。「ニネベの王」(3:5)の悔い改めも、そのような時代背景の設定でこそ成り立つものである。他方で、「ニネベの都は滅びる」(3:4)という預言句は、アッシリア帝国が権勢を維持していた時代には属国民が告げることの許されるものではなかったと推認され、本書の成立はアッシリア帝国の滅亡期(前620年代~)以降とも考えられる。アッシリアは、前612年に新バビロニア・メディア連合軍によってニネベが陥落、609年には亡命王朝も滅亡している。

・本書の物語で、嵐の中、海に投げ込まれたヨナが魚に呑み込まれ、三日三晩を過ごしたという逸話は、新約・福音書(上述)で「復活」を指し示す「しるし」として位置づけられている。ただし、本書は、この逸話を「ヨナの死と復活」としてではなく、「ヨナの悔い改めと赦し(としての救済)」として描いている(2章)。

使徒書日課(ヘブライ2章より)

・「ヘブライ人への手紙」は、新約中で「パウロ書簡集」の後に配置されてきた書簡文書。末尾には書簡に典型的な結語挨拶が置かれているが、文書冒頭にあるべき定型文(差出人名、宛人名、祝福を伴う挨拶など)が完全に欠落しており、本書を解釈する上で前提となる背景情報が示されない文書となっている。東方教会では、これを「パウロ書簡集」の一部として扱う習慣があるが、西方教会では、早い段階(2世紀ごろ)からパウロ著者説を退け、他の使徒ないし宣教者(アポロなど)を著者と推認する提案が繰り返し行われてきたが、共通理解は得られないまま新約正典として受け入れられてきた。

・本書の新約正典における独自性(特異性)は、イエス・キリストを旧約聖書に基づく贖罪神学の中に位置づけたことにある。「十字架と復活」によって示される贖罪信仰は、キリスト教の正統教理の中核をなすものであるが、厳密な意味で旧約聖書の贖罪神学をこれに適用しているのは、本書のみである。四福音書は、主イエスの十字架の出来事を「主の過越」(出エジプト12章)を典拠として捉えており、十字架につけられたイエスは、もっぱら「過越の小羊」として位置づけている。「出エジプト記」の示す「主の過越し」には、「神の恵みとしての救済」という救済神学はあるが、「人の罪を贖う犠牲」という贖罪神学はない。「パウロ書簡」は、このような「過越の小羊」として主イエスを位置づける理解を前提にしつつ、「洗礼」によって「キリストの死と復活」に結びつくことが「罪」からの解放に至らせる道筋であるという救済論を展開しており、厳密には贖罪神学を構成していない。

・本書は、旧約律法「レビ記」16章等で三大祭(過越祭、七週祭、仮庵祭)と並んで位置づけられている「贖罪日」の祭儀に基づいて、イエス・キリストが全人類のために最後完全な形で「贖罪」を完成されたという主張を展開している。旧約律法における「贖罪日」祭儀では、年に一度、大祭司が至聖所に入り、民全体の罪を贖うための犠牲を献げ、赦しを求めるとりなしを為す。本書は、イエスが伝説的な祭司王「メルキゼデク」に系譜を持つ完全な大祭司としてこの贖罪祭儀を執り行い、なおかつ、その贖罪のための犠牲として自身を献げられるということと、「天の幕屋」で為されたのが「十字架の出来事」の意味で、これが最後完全な形で完成したので、再度の「十字架」は不要であると主張している。

・このような贖罪神学を展開するにあたり、本書は、序文(1章)で御子(イエス・キリスト)の神的優位性を「天使」との比較で主張した上で、日課箇所では、信者がキリストによって与えられる救いをよく理解して心に留めることによって、罰を受けて当然の罪過を犯すことがないようにと勧めている。このような勧めは、11章で旧約の信仰者らを羅列した後、12章以降であらためて展開されている。

福音書日課(マルコ 4 章より)

・日課箇所は、主イエスが湖上で嵐を鎮められたとする説話伝承。共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えており、「マルコ」と「ルカ」は、前後の文脈も含めて共通の展開の中にこの説話伝承を置いている。すなわち、「マルコ」と「ルカ」は、「種を蒔く人のたとえ」から始まる一連の「たとえ」を用いた教えが為されたことを伝えるまともに続いて、この湖上の嵐の出来事を物語り、続いて湖の対岸の地における「悪霊に取りつかれた異邦人のいやし」の説話伝承に至る(ただし、「ルカ」は、前段の「たとえ」を用いた教えの場面と時間的に切り離しているのに対して、「マルコ」は時間的な連続性を維持している)。「マタイ」は、後段は同じ説話伝承に接続しているが、前段は、さまざまな「癒やし」の逸話に触れた上で、弟子たちの覚悟を問う対話を経て、日課箇所の説話に入っている。「マタイ」がこの日課箇所を「弟子」としての姿勢や態度を問う逸話として位置づけようとしているのに対して、「マルコ」は、「たとえ」によって語る主イエスのもとに参集する弟子たちが導かれていくところに至る旅路における主イエスに対する信頼を確かなものにするよう促す逸話として位置づけている、と言える。

・36 節で、主イエスと弟子たちを乗せた舟が漕ぎ出したとき、岸边に「群衆」が残されていたことが敢えて述べられている。この「群衆」は、「種を蒔く人のたとえ」から始まる一連の教えを湖上の舟から語る主イエスの言葉に岸边で耳を傾けていた人々である(4:1)。ここで、「マルコ」は敢えて「弟子たち」と「群衆」の区別を明示しようとしている。「弟子たち」は、主イエスの教えを聞くだけでなく、「水」を越えて主イエスの乗る「舟」に同乗して「向こう岸に渡る」旅に加わる者である。しかし、そうするのは、彼らがすでに覚悟ができていたり、主イエスに対する信頼が確かであったりするからではない。むしろ、教えを聞くだけでなく、主イエスの乗る「舟」に同乗してみても初めて、主イエスの神力的な力を目の当たりにするようになり、「信じる」ことへと導かれていくと見ているのが、ここで展開されていること(特に「マルコ」で顕著!)である。

・主イエスの「眠り」は、「神の沈黙」という旧新約で繰り返し取り上げられる神学的モチーフを反映している。しかし、「ヨナ書」のヨナの「眠り」との類比に基づけば、主イエスの「眠り」は、「信頼」のモチーフとなる。ここでは、この二重のモチーフが意図されて、弟子たちの「信仰」が呼び覚まされているのだろう。

来週の誕生日 (2月15日~21日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-357「力に満ちたる」(= I 77 番「み神はちからの」)は、22歳で早世した 18-19 世紀英国の詩人 H. ホワイトが、ドイツのカトリック讃美歌集(1784 年

版)で「アヴェ・マリア、光り輝く暁の星よ」に付されていた曲に合わせて作詞した讃美歌。

・21-56「主よ、いのちのパンをさき」(= I 187)は、19-20 世紀米国のメソジスト信徒メアリー・ラスベリーの作詞で、夏期セミナーのために「聖書研究の歌」と題して書かれた。曲は、19 世紀米国で讃美歌作曲家として知られた音楽教師シャーウィンが、この歌詞のために作曲。

・21-402「いともとうとき」(= I 502 番)は、19 世紀英国人で福音唱歌作家として信徒伝道活動に励んだキャサリン・ハーンの作詞。曲は、同時代に米国で大衆伝道に携わり多くの福音唱歌を作曲した音楽家ウィリアム・フィッシャーの作曲。大衆伝道運動の中で広く歌われてきた。

21-357「力に満ちたる」

The Lord of our God is clothed with might

1. The Lord our God is clothed with might, / The winds obey His will; / He speaks, and, in His heavenly height, / The rolling sun stands still.
2. Rebel, ye waves, and o'er the land / With threatening aspect roar; / The Lord uplifts His awful hand, / And chains you to the shore.
3. Howl, winds of night, your force combine; / Without His high behest, / Ye shall not, in the mountain pine, / Disturb the sparrow's nest.
4. His voice sublime is heard afar, / In distant peals it dies; / He yokes the whirlwind to His ear, / And sweeps the howling skies.
5. Ye nations, bend, in reverence bend; / Ye monarchs, wait His nod, / And bid the choral song ascend / To celebrate your God.

21-56「主よ、いのちのパンをさき」

Break Thou the Bread of Life

1. Break Thou the bread of life, dear Lord, to me, / As Thou didst break the loaves beside the sea; / Beyond the sacred page I seek Thee, Lord; / My spirit pants for Thee, O living Word!
2. Bless Thou the truth, dear Lord, to me, to me, / As Thou didst bless the bread by Galilee; / Then shall all bondage cease, all fetters fall; / And I shall find my peace, my all in all.
3. Thou art the bread of life, O Lord, to me, / Thy holy Word the truth that saveth me; / Give me to eat and live with Thee above; / Teach me to love Thy truth, for Thou art love.
4. Oh, send Thy Spirit, Lord, now unto me, / That He may touch my eyes, and make me see: / Show me the truth concealed within Thy Word, / And in Thy Book revealed I see the Lord.

21-402「いともとうとき」

I Love to Tell the Story

1. I love to tell the story of unseen things above, / Of Jesus and His glory, of Jesus and His love; / I love to tell the story, because I know 'tis true, / It satisfies my longings as nothing else would do.

Refrain: I love to tell the story, 'Twill be my theme in glory, To tell the old, old story. Of Jesus and His love.

2. I love to tell the story, more wonderful it seems / Than all the golden fancies of all our golden dreams; / I love to tell the story, it did so much for me, / And that is just the reason I tell it now to thee.
3. I love to tell the story, 'tis pleasant to repeat, / What seems each time I tell it more wonderfully sweet; / I love to tell the story, for some have never heard / The message of salvation from God's own holy Word.
4. I love to tell the story, for those who know it best / Seem hungering and thirsting to hear it like the rest; / And when in scenes of glory I sing the new, new song, / 'Twill be the old, old story that I have loved so long.